

# ◇ 国 語

国1-1～国1-17まで17ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「批評家の不在」というのは、私が文壇という世界に足を踏み入れて十年この方、耳にしなかったことがないというくらい、絶えず誰かしらが語っていた不満で、もういい加減に聞き飽きたし、私自身も言い飽きた。

とにかく、毎年、リクゾクと若手小説家が文壇デビューを果たしている一方で、まさにその彼らを論じる同時代の若手批評家がない、足りないというショウソウ感<sup>B</sup>は、ますます熱を帯びてきていて、この一、二年の新卒者採用の好転と比してみても、志望者にとっては、まさに夢のような売り手市場である。

一部に、文学賞の選考委員から批評家が姿を消してしまつたなどを、「批評家の切り捨て」と非難する向きがあるが、だから具体的に、誰と誰と誰が、「切り捨て」られているのか、名前を言うべきである。問題意識として、私はそれを正しいと思うが、名前が挙げられない以上は、結局、虚しい批評家待望論を反復することにしかならない。

実際のところ、この十年ほどの間にも、玉石混淆ながら様々な批評が書かれてきたが、特徴的なのは、「専門批評家」ではなく、コラムニスト、編集者、社会学者、精神分析家といった、本職は別という人たちによる仕事が非常に多かったという点で、文壇から片思的に、あの人はどうしても書いてくれないのだろうと切望されているようなケースもある。

批評というのは、もちろん、誰がどう書いてもいいわけで、小説と同様に、その範囲は今や紙バイタイを主とする一部の人間だけではなく、ネット上にまで無限に拡大している。

私自身も、ジャンルを問わず批評は書くし、それをまとめて『モノログ』なる本まで出したところだが、しかし、その内容には、当然のことながら、常に一定の「小説家ならでは」がある。それがなければ、そもそも小説家が批評を書く意味などないのだが、しかし、「小説家ならでは」というそのことに、一種の甘えがあるのも事実である。取り上げる作品の気ままさからしてそうだし、苦痛を伴うような手厳しさを回避していることもそうである。私はたとえ「詩人」であるということに甘えて、論理も何もない、単なる主観的な印象を、言葉を大事にしている、といった類の勿体ぶつたパフォーマンスだけで書いているよ

うな人の文芸時評が嫌いだが、だからこそ、「専業批評家」とは違った味があるのだと、それを尊ぶ人もいる。

こうなると、問題は結局、批評とは何ぞやという根本の話へと向かわざるを得ない。

些<sup>(a)</sup>か反動的<sup>(b)</sup>に聞こえるかもしれないが、私は、作品には、「作者の意図」というものが必ずあると信じている。本人の自覚の程度は様々だろうし、振り返ってみて、あとから自分で発見したり、訂正したりすることもあろうが、いずれにせよ、実作に当たっては、なにがしか具体的な動機がなければ、小説の文章など書けるはずがない。そうした事実を徒<sup>いたずら</sup>に隠蔽<sup>いんぺい</sup>して、創作行為を

ア する見方を、私は幼いと思う。しかし他方で、キリスト教の神学者が、神の言葉の「真意」を特定しようとするように、「作者の意図」を「作品の唯一の意味」として、どこまでも追究することが、読書のあるべき姿だとも思わない。我々は二〇世紀という時代を曲がりなりにも経てきたわけで、情報というものが、常に対象と観察者との相関関係の中で形成されることを知っている。作品には「意味」があるが、「唯一の本当の意味」などというものが語れるわけではないことは、カフカの小説を巡る膨大な解釈一つを取ってみても明らかである。

そうなると、要は、見え方の問題だということになる。

私は、かつてのイデオロギー批評のように、どんなテキストを読んでも、そこに階級闘争の物語を見てしまうといった、世界からの入力情報の処理パターンが、たつた一種類しかないような、コウチョコクした、自己反復的な批評を面白いと思わない。その意味では、訂正可能性を認めつつ、「作者の意図」をカソウ<sup>カソウ</sup>的に考えるということは、そうしてナルシステックに閉塞した回路から、自己を他者性へと向けて解放するための有効な方法である。しかし、テキスト自体のためには、そんな乱暴な批評であっても、それなりに数が揃って、多様性が確保されるのであれば、必ずしも非とすべきでもない。現実的に、あらゆる作品が、そうした多様性に恵まれるということは困難だが。

あきらかに、現代の「兼業批評家」の活躍は、そうした見え方の豊富さへの需要が要請したものである。「唯一の正しい読解」などというものがないとするならば、多様さを通じて作品にアプローチするしかなく、その際、兼業批評家の本業は、そのアプローチの有り様を明示してくれる。

とすると、あえて「專業」である批評家の存在意義とは何なのだろうか？ 本質的に、私には「專業」と「兼業」とで批評家に違いがあるとは思えない。ところが、兼業批評家がこれほどの賑わいを見せているにも拘わらず、文壇はやはり、專業批評家を熱烈に求めているのである。

極単純な話だが、專業化することで、より多くの時間を批評のために費やせるという利点がある。現実的には、大学で教えるなど、一定の経済的安定は不可欠だが、それによって、目配りの行き届く作品の点数は増え、一作あたりにかけることのできる時間も増えることだろう。利点は、状況論を語れるようになる、ということだろうか。

六注  
アイデンティティ・クライシスに陥った專業批評家の中でも、最も無惨なのは、「評論」という仕事と「評価」という仕事とを勘違いしている人である。そういう人は、「評論家」ではなく、「評価家」と正確に自称してみれば、自分の仕事の滑稽さがよく分かるだろう。

個人的に、私は個々の小説作品の優劣を信じている。つまらないケータイ小説とドストエフスキの小説との間には、差異以上の優劣があると考えるが、その評価が「イ」に肯定されるべきだとは全然思わない。『恋空』の方が、『カラマーゾフ』よりも、自分にとっては大切だという人がいれば、それはその人の勝手であって、そうになると、結局評価などというものは、ネット上を駆け巡っている「バトン」と何も変わらなくなる。単に自分が、何に強く関心を寄せ、重きを置く人間か、ということを通じているに過ぎず、それで共感したり、信頼を寄せたりする人もいれば、気が合わないと思う人もいる。そういう仕事はいかにも退屈だが、これだけ大量に小説が溢れ返っていて、人が一体、何を読めばいいのか分からなくなっている時代には、「評価家」の活動する領域は、むしろ拡大していると見るべきだろう。

少し前から、文芸誌では、批評家に小説のことが分かるのかという、古典的な「論争」がひよっこり持ち上がっていて、そのタイミングを考えてみることは面白いが、内容的に、例えば、一九五一年に三島由紀夫と大岡昇平との間で交わされた対談（『大猿問答』に於ける「批評家への注文」及び、それに対する亀井勝一郎の反論、更には三島の再反論（「批評家に小説がわかるか」と比べて、半世紀後の議論のどこに更新点があるかはしっかりと見るべきである。

三島・大岡対談でも、批評家の技術批評の不可能について語られていたが、どうしてそれを批評家に語ってもらいたいと思うのかが、私には分からない。昨今の議論では、必ずこれが、スポーツ解説と比較されるが、どんな野球の見巧者でも、イチローや落合よりも、バッティング技術に関して深い理解を持っている人などいるはずがない。小説でも、実作からのみ経験的に分かることは多々あるが、それならそれは、小説家が自分で語ればよいことである。批評家に向かつて、どんなにスゴイことをしているか、オマエらちゃんと理解して、読者に教えてやれなどと「注文」を付けるのは、ナンセンスな話である。

(平野啓一郎「批評についての雑感」による)

注 アイデンティティⅡ人格における存在証明・同一性

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A リクゾク

- ① 明治期のフウゾクの研究
- ② 団体にシヨゾクする
- ③ キゾクの生活を描く
- ④ ゾクヘンの映画をつくる
- ⑤ トウゾクにおそわれる

1

B ショウソウ

- ① 政権をショウアクした
- ② ショウシンをいやす旅
- ③ コウシヨウによる物語
- ④ ショウサイな報告
- ⑤ 戦争でショウドと化する

2

C バイタイ

- ① ニュウバイの季節
- ② ショクバイとして作用する
- ③ 損害へのバイシヨウ
- ④ コウバイ意欲が高まる
- ⑤ 植物をサイバイする

3

D コウチヨク

- ① 強権にテイコウする
- ② 列車ダイヤのヘンコウ
- ③ キヨウコウな態度
- ④ 時代の変化のチヨウコウ
- ⑤ その意見にシュコウできない

4

E カソウ

- ① ソウホウの考え
- ② 神の天地ソウゾウ
- ③ 事件をソウサする
- ④ エンソウが難しい曲
- ⑤ 別のことをソウキする

5

問二 空欄 ・ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

- ① 作為化
- ② 神秘化
- ③ 合理化
- ④ 細密化
- ⑤ 明確化

- ① 断続的
- ② 両義的
- ③ 普遍的
- ④ 方法的
- ⑤ 懐疑的

問三 傍線部 (a) 「玉石混淆」・(b) 「反動的」・(c) 「見巧者」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の

①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 「玉石混淆」

- ① よく似たもので実質が全くちがうものがいっしょになって区別がつかないこと
- ② すぐれたものとつまらないものがまじって区別がつかないこと
- ③ 役に立つものと立たないものがいっしょになって区別がつかないこと
- ④ 値段の高いものと高くないものがまじりあって区別がつかないこと

(b) 「反動的」

- ① 反対の方向へ走り出すこと
- ② 作用したことがそのまま返ってくること
- ③ 物事が起こったらすぐ反応すること
- ④ 歴史の流れに逆行すること

(c) 「見巧者」

- ①物の見方のじょうずな人
- ②見物人として立派な人
- ③きびしい観察をする人
- ④詳しく細部まで見る人

10

問四 傍線部(一)「売り手市場である」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ①若手小説家に匹敵するような若手批評家は存在しないということ
- ②批評が売れることは少ないために、若手批評家が出てこないということ
- ③若手批評家が求められて、需要はあるが供給はないという状態であること
- ④市場では、よく売れる小説の方が、批評より引く手数多あまたであるということ
- ⑤若手小説家とともに、若手批評家が文壇に出てゆくことが望ましいということ

11



問五 傍線部(二)「それ」とは、何をさすか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ①文学賞の選考委員に、どのような批評家が消えたのか、名前を挙げて指摘すること
- ②文学賞の選考委員に批評家がいることを非難すること自体は、悪いことではないこと
- ③文学賞の選考委員に、批評家でなく小説家ばかりがなっていること
- ④文学賞の選考委員から批評家はずれていることを、「批評家の切り捨て」と非難すること

問六 傍線部(三)「あの人」とは、誰のことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ①専門批評家
- ②詩人
- ③小説家
- ④編集者、社会学者、精神分析家

問七 傍線部(四)「小説家ならではの」というそのことに、一種の甘えがあるのも事実である」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ①批評文を書く時に、批評する作品について自由に解釈して書いているところがある。
- ②批評文を書く時に、自由に批評する作品を選び、きびしい批判を入れるのを避けて書いているところがある。
- ③批評文を書く時に、小説の実作者としての特色を生かして、その経験からくる批評を書いているところがある。
- ④批評文を書く時に、いろいろな作品を気ままに選び、自由自在に批評して書いているところがある。

問八 傍線部(五)「現代の「兼業批評家」の活躍は、そうした見え方の豊かさへの需要が要請したものである」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

① 社会学者や精神分析家などが批評家として活躍しているのは、かつてのイデオロギー批評への反省から出てきたものである。

② 社会学者や精神分析家などが批評家として活躍しているのは、作品の読解にもさまざまなアプローチがあることからくるものである。

③ 社会学者や精神分析家などが批評家として活躍しているのは、「専業批評家」が、自分の批評に自信をなくしているからである。

④ 社会学者や精神分析家などが批評家として活躍しているのは、作品の読解が、読む人の「兼業」性にまかされているからである。

問九 傍線部(六)「アイデンティティ・クライシスに陥った専業批評家」とは、どういうことか。その説明として最も適当なもの、次の①～④の中から一つ選べ。

16

① 自分が専業批評家であるにもかかわらず、自分がどのような批評をすればいいのかわからなくなった人

② 自分が専業批評家であるにもかかわらず、小説を書きたくなくなった人

③ 自分が専業批評家であるにもかかわらず、自分の生きている意味がわからなくなった人

④ 自分が専業批評家であるにもかかわらず、「評論」と「評価」のちがいがわからなくなった人

問十 傍線部(七)「イチローや落合よりも、バッティング技術に関して深い理解を持っている人などいるはずがない」とは、  
どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

17

- ①すぐれた批評家が、小説の技術や創作の方法について、最も深い理解と分析力をもっているものである。
- ②すぐれた小説家が、小説の技術や創作の方法について、最も深い理解をもっているものである。
- ③すぐれた小説家のみが、小説の技術や創作の方法について、自分の経験にもとづいて語ることができるものである。
- ④すぐれた小説家と批評家が、小説の技術や創作の方法について対談することで、すぐれた小説が生まれてくるものである。

問十一 本文の内容に合致しないものを、次の①～⑥の中から一つ選べ。

18

- ①大岡昇平と三島由紀夫は小説家である。
- ②どんな小説を読んでも、そこに階級闘争の物語を見ってしまうという批評は、すぐれた批評である。
- ③「評論家」と「評価家」は、ちがうのである。
- ④小説を批評する時は、小説の実作から経験的にわかることが多い。
- ⑤専門批評家の利点は、一作品を批評するのに時間をかけられることである。
- ⑥小説の実作の場合、書くには何かの具体的な動機があるものである。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

この本が吟味しようとしているのは、しばしば世界最高の劇作家と呼ばれるウィリアム・シェイクスピア（一五六四〜一六一六）が、どんな手法を用いて作品を書いたかという問題である。こういう言い方をすると、登場人物の描き方や台詞の書き方や戯曲の組立て方といった技巧的な問題が、もっぱら論じられるのだらうと思うひとがいるかも知れない。もちろんそういうものについても論じるが、それは私が主に意図していることではない。劇とは、この世界で生きている人間を扱うものだから、劇作家がどんな手法を用いて作品を書いたかという問題を検討するためには、その劇作家が世界や人間をどのように捉えていたかを知らねばならない。あるいは、演劇そのものについてどう考えていたかを理解せねばならない。ある劇作家の手法について論じることは、実は、当の劇作家の世界観や人間観や演劇観について論じることになるのである。もしも、手法についての議論は（a）小手先の技巧についての議論にすぎないと考えて軽視するひとがいたら、そのひとは救いようがないほど誤解を犯しているのだ。

シェイクスピアの戯曲はすぐれた文芸作品であり、文芸作品として鑑賞しても——具体的に言うると、シヨサイ（a）でひとり静かにそれを読んで——十分に面白い。しかし、シェイクスピアは自らの作品を、何よりもまず劇場で上演されるもの、観客によって受容されるものとして書いた。あらゆる劇作家の例に洩れず、シェイクスピアも、自分が想定しているやり方で観客が反応することを期待したに違いない。観客を笑わせたいと思う個所で実際に観客が笑うことを、あるいは、観客を劇に集中させたいと思う個所で、観客が舞台上で起つことにだけ注目することを、望んだに違いない。だからシェイクスピアは、どうすればそれが可能になるかについて、**イ** 注意を払いながら、戯曲を書いたと考えねばならない。つまりこの本は、シェイクスピアがひとりの劇作家として、どんなことを考えながら作品を執筆したか、観客を自分の望み通りに反応させるためにどんなたぐらみをめぐらしたかという問題を、検討しようとしているのである。

シェイクスピアが劇作家としてたぐらみをめぐらすに際して、何よりも**ウ** 吟味したのは、おそらく、どの段階でど

んな情報をどのようにして観客にテイキョウ<sup>キョウ</sup>するかという問題だったであろう。しかも彼は、自分が書こうとしている戯曲が含む情報だけを念頭においていればいいというわけではなかった。なぜなら、観客は決して白紙状態で劇場へやって来るわけではないからだ。時にはシェイクスピアは、自分が執筆する戯曲の内容について、観客が既にもっている情報を積極的に利用したこともあったであろう。この本は、劇作家としてのシェイクスピアがどんな手法を用いて観客反応を操作したのかを論じるものなのだが、その手法とは、特に作者が観客に情報をテイキョウするやり方に関わっているのである。別の言い方をするなら、この本は、ある劇が上演される時に、作者と観客との間でその劇に関する情報の処理をめぐってどんなことが起るかを、主として検討しているのである。

ただ、観客と言っても一様ではない。<sup>(二)</sup> シェイクスピアは自分が生きている時代の観客を念頭において創作活動を行ったのだが、彼の劇は時代を越え国境を越えて、今なお鑑賞され続けている。そして、たとえば現代の観客は、シェイクスピアの時代の観客がもってはいなかった情報を多量にもっている。他方、現代の観客は、シェイクスピアの時代の観客にとっては**自明**であつた事柄について、ほとんど何も知らない場合がある。私は、どちらかというシェイクスピアの時代の観客を**コウリョ**しながら論を進めたつもりだが、観客というものを、時間や空間に**ソクバク**されない、もつと普遍的な存在として捉えようとした場合もある。

観客反応を念頭におきながらシェイクスピア劇を分析した結果、明らかになったことがひとつある。それは、シェイクスピアは特定の人物の肩をもったり、特定の主張を支持したりすることを、徹底的に避けているという事実である。シェイクスピアは、どれほどの悪人でも全面的に否定したりはしないし、どれほどの善人でも全面的に肯定したりはしない。

それどころか、善悪を判断する基準についても、自らの立場を曖昧<sup>あいまい</sup>にしがちだ。また、彼は自らが描く世界に対して常に何ほどの距離を保とうとしているように見える。このことは、彼が観客にもある要求を突きつけることを意味する。観客が特定の人物と同化したり、劇の世界に没入したりすることを防ぐために、シェイクスピアはありとあらゆる手を使っている。特定の人物と一体になつて——あるいは劇の世界に入りこんで——劇の展開を追うのは、観客にとっては、非常に楽で呑気<sup>のんき</sup>で

エ

行為なのだが、シェイクスピアは、観客がそういう行為に安住するのを厳しく禁じている。

分りやすい言い方をすると、<sup>(三)</sup>シェイクスピア劇とは、観客が気楽に享受することを許さない劇なのである。二十世紀のドイツを代表する劇作家ベルトルト・ブレヒト（一八九八—一九五六）は、劇の世界や人物と観客との間に距離が生じることを《異化効果》という言葉で呼んだが、まるで、シェイクスピアはブレヒトの演劇理論を彼よりも何百年も前に実践していたように見える。

十八世紀から十九世紀にかけてのイギリス・ロマン派の文人たちは、シェイクスピアを美化、神格化し、彼をまるで人類愛の伝道者であるかのように扱った。こういう態度は、現在の日本で広く受容<sup>うけい</sup>れられているシェイクスピア観にも認められるようだ。もちろんシェイクスピア劇の個々の台詞には、ロマン派の考え方を裏づけるように感じられるものもある。しかし、劇の台詞とは、あくまで特定の人物が特定の状況で語るものであり、そこで表明されている見解とシェイクスピア自身の見解とは、<sup>(E)</sup>ゲンミツに区別せねばならない。彼の戯曲を オ 吟味すればするほど、私は、ロマン派流のシェイクスピア理解に疑問を感じるようになった。もしもこの本に立場と呼べるものがあるとすれば、それは、ロマン派以来のシェイクスピア神格化に対して異議を申し立て、手法の吟味を手がかりにして、シェイクスピアを、ロマン派の文人たちが思い描いていたとは全く異なるラディカルな作家として——人間や世界のあり方を無条件に是認することをためらった作家として——捉え直そうとしたところにあると言えるだろう。

（喜志哲雄の文章による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を使うものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ショサイ

- ① 台風サイライ
- ③ サイカイ沐浴もくよく
- ⑤ サイキ煥発かんぱつ

- ② サイシヨク主義
- ④ 粉骨サイシン

19

B テイキヨウ

- ① キンキヨウを報告する
- ③ 猛暑がエイキヨウする
- ⑤ 犯行をジキヨウする

- ② 大いにキヨウシユクする
- ④ 相手をキヨウハクする

20

C コウリョ

- ① コウガイに住む
- ③ 敵にコウサンする
- ⑤ コウシを混同する

- ② 物事をジュツコウする
- ④ 船がコウコウする

21

D ソクバク

- ① バクシユウの季節
- ③ バクゼンとした理由
- ⑤ バクマツの出来事

- ② バクダン発言
- ④ 盗人をホバクする

22

E ゲンミツ

- ① ゲンセイな審査
- ③ 流れのゲンリュウ
- ⑤ ゲンミョウな響き

- ② 明治のゲンクン
- ④ ゲンケイを嘆願する

23

問二 空欄 

ア
---

・

イ
---

・

ウ
---

・

エ
---

・

オ
---

 に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

ア
---

 ①適格な ②浅薄な ③賢明な ④端的な ⑤巧妙な

イ
---

 ①細心の ②最速の ③最大の ④余裕の ⑤無心の

ウ
---

 ①大胆に ②適当に ③慎重に ④早速に ⑤正確に

エ
---

 ①快適な ②不快な ③見事な ④唐突な ⑤高等な

オ
---

 ①簡単に ②丹念に ③適度に ④大層に ⑤大量に

問三 傍線部 (a)「小手先」・(b)「自明」・(c)「安住する」と同じ正しい使い方をした文章を、次の各群の①～③の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

(a) ①小手先を調べる ②小手先が利きく人 ③小手先で切り離す

(b) ①部屋の明かりが自明する ②法律を守るのは自明のことだ ③原因について自明した

(c) ①自宅に安住する ②現在の地位に安住する ③心の底から安住する

31
----

30
----

29
----

28
----

27
----

26
----

25
----

24
----



問四 傍線部(一)「シェイクスピアは自分が生きている時代の観客を念頭において創作活動を行ったのだが、彼の劇は時代を越え国境を越えて、今なお鑑賞され続けている」と筆者が考える理由は何か。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

32

- ①シェイクスピアが人間の善悪を明快に描き分けていて信頼できるから。
- ②シェイクスピアが特定の人物の肩を持ちたり、特定の主張を支持していないから。
- ③シェイクスピアが人類愛の伝道者として立派な人だから。
- ④シェイクスピアが自分と同じ時代の観客以外も想定して書いたから。

問五 傍線部(二)「シェイクスピア劇とは、観客が気楽に享受することを許さない劇なのである」と筆者は記すが、それではシェイクスピアは観客にどのような態度を求めているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

33

- ①劇の世界や人物と同化してほしい。
- ②劇の世界や人物と自分の間に距離を感じてほしい。
- ③劇の台詞はシェイクスピア自身の考え方だと思っしてほしい。
- ④劇の台詞に人類愛やロマンを感じてほしい。

問六 本文の内容と合致しないものはどれか。次の①～⑥の中から二つ選べ。

- ① シェイクスピアの戯曲は文芸作品として読んでいるだけでも面白い。
- ② シェイクスピアはブレヒトの理論を彼よりも早く実践していた。
- ③ シェイクスピアは劇中で善悪の判断を曖昧あいまいにしている。
- ④ シェイクスピアは観客をたのしませることだけを考えていた。
- ⑤ シェイクスピアは世界的に著名な劇作家である。
- ⑥ シェイクスピアは観客を自分の望み通りに反応させることができなかった。

問七 この文章の見出しとして最も適当なものとはどれか。次の①～④の中から一つ選べ。

- ① シェイクスピアの神格化
- ② シェイクスピアのたくらみ
- ③ シェイクスピアの真実
- ④ シェイクスピアの謎